

つながる、つながる、なにがつながる？

< るあんのフランスパリ日記 その④ >

By セッキー（るあん）

※「るあん」…音風景をキーワードに文化活動を行う「ビッグママ・プロジェクト」から派生した音楽隊。2013 年、JAA 国際アコーディオンコンクール・パフォーマンスアンサンブル部門にて、桑山哲也賞。翌年、横浜赤レンガ倉庫にて、アコーディオニスト coba 主催の「Bellows Lovers Night」に出演。一音一会を大切に、人とのつながりの中で、日々活動している。

<https://bigmama.luann.wixsite.com/main>



ボンジュール！私たちは音楽隊「るあん」といいます。
メンバーは、アコーディオニストのエLEGانس・カオルンに、ヴァイオリンのヒラリン、それから食いしん坊のスガちゃんに（マンドリン、フルート、歌）、カーリーなポニョポニョ・ヘアがトレードマークの私、セッキーです。

（※①～③の内容を知りたい方は、下記のHPを開いてくださいね。）

<http://www.kanto-acco.jp>（実行委員会ニュース）

2020年コロナの春

まさか私たちがパリに行った半年前、こんなことが起こるとは予想もしていなかった。…シリーズで進めてきた「パリ日記」。連載も4回目となり、いよいよクライマックスに差し掛かったが。あの時はまだ、何の騒ぎもない穏やかな秋の日差しが、人々を包み込んでいた。

タイムワープすれば日本に帰国する前日の昼下がり、私たち「るあん」は、シズさんとともに、パリのCafé（カフェ）兼 Brasserie（※ブラッスリー。お酒と食事を提供するお店の総称。）にいた。もう少し詳しく言えば、シズさんが私たちをブルゴーニュ地方の郷土料理で有名な「Les Caves la Bourgogne」というお店に連れて行ってくれた。そこで私たちは、「2019・秋パリるあん」最後のゲリラ演奏の練り歩きルートを組み立てていたのだった。（※シズさん…るあんがパリ滞在中、大変お世話になった日本人女性。ノートルダム寺院近くで美容室を営む。）

…シズさんは、「この道を通して、これこれこーすれば、ウチの美容室に戻ってこれるからね…」と言い残すと、ランチを注文する前に席を立ちあがった。美容院の方が忙しく、ここでひとまずバイバイ。かくして私たちは、ルートを頭に入れると、まずは腹ごしらえ！というくだりになったのだった。



写真左。ブラッスリーで練り歩きルートを組み立てる。
左から、カオルン、セッキー、シズさん。



写真中央&右
いつでも出陣の前は、
腹ごしらえの「るあん」

我々の中で、一足先に食事を終えたのは、カオルンだ。予め店内で弾いても良いと承諾を得ていたのので、彼女はカウンター近くで、アコーディオンをシャラシャラと弾き始めた。Les Champs-Elysee (おおシャンゼリゼ)、Style Musette (スタイル・ミュゼット)、Passion (パシオン) など、お得意のレパートリーを軽やかに奏でる。

…やがて彼女は立ち上がるとテラスへ。もちろんセッキーも、動画をとろうとスマホを持って追いかけた。

テラス席では、アコーディオンに合わせ、踊りたくてムズムズしている年輩のご婦人がいてね。しばらくカオルンはミュゼットを弾いていたのだが、そのうちに「La Java Bleue (青色のジャヴァ)」を弾き始めると、ご婦人はいよいよずっと立ち上がった。そして彼女はアコーディオンと向かい合わせになり、両手を広げステップを踏みながら、滑らかなフランス語で歌い始めた。

Il est au bal musette
Un air rempli de douceur
Qui fait tourner les têtes
Qui fait chavirer les cœurs...

ミュゼットのダンスホールには、
やさしさに満ちたメロディーが流れ
それは頭をくらくらさせ
心を揺り動かす...



(ちなみにこのテラス演奏の様子は、YouTube で「るあんアコーディオン」と検索すると、見ることができます。ご婦人も踊っていたけど、カオルンもアコを弾きながら優雅に踊っていました。)



そして…テラスのカオルンも一息ついた頃。店内でくつろいでいた、スガちゃんやヒラリンも、そろそろ身支度を整える頃合いとなっていた。こうして我々は美味しいランチに「Merci!」とお勘定を済ませると、パリの街へと繰り出した。

さて、ここで少し、練り歩きルートのご説明。

我々が奏で歩くのは、パリ5区にある長さ605mのムフタル通り（Rue Mouffetard）だ。多くのガイドブックで取り上げられる有名なところで、治安も良いし、昔ながらのパリの雰囲気もしっかり残っている。「パリの胃袋」とも言われ、その名の通り、フランス料理からレバノン料理、ペルシャ料理、ベトナム料理、日本料理まで…、各国のレストランが軒を連ねて並んでいる。ビストロ、ブラスリー、カフェの他、食材店やマルシェもあり、パリ市中でもっとも賑わう地域の1つなのだ。

…と、このように我々は、ムフタル通りを演奏しながらずんずん進み続けた。数日前、ノートルダムから歩いた時は、私たちの荷物を持って先導してくれたフランス在住のミサさん（カオルンの従妹）がいたのだが、今回はるあんのカルテットのみななので、自分の荷物は誰かに任せるわけにもいかない。カオルンなどは、かちかち山のようにアコケースを背負いながら、赤いアコーディオンを弾いて練り歩いた。…まあそれにしても、アコもヴァイオリンもフルートもマンドリンも…どの楽器も本当によく鳴り響くこと！コントレスカルプ広場から坂下のサン・メダール教会まで、ガタガタとした道幅の狭い石畳が続くのだが、どこもかしこも響きが良いのだ。



（アコケースを背負って
練り歩く、カオルン。）

そして…一音一会の出会いも、実にハートウォーミングだったことをお伝えしておこう。アパートメントの上階の出窓から手を振ったり、手拍子をしてくれる人もいた。私たちに近寄り、コインを手渡してくれた、学生風の青年もいた。はたまた後ろを振り向けば、熟年のロマンスグレーのカップルが、陽気にステップを踏みながら私たちの後ろについてきたり…。先生を先頭に校外学習か何かで集団で歩く子どもたちは、「Bravo!」と言いながら拍手してくれたりもした。



…今回の旅で「るあん」がラッキーだったのは、良い意味でパリの街に溶け込めたこと。もちろんそれは、私たちをサポートしてくれたミサさんやシズさんが、長年パリの街に住み、地域社会に溶け込んで信頼を得たから、という背景があるのだけど。

そのシズさんのお店が、るあん練り歩きルートの終点だった。ノートルダム近く、白い可愛らしい美容室、「ATELIER 0' SHIZ-U」。

パリの日没は日本よりずっと遅いが、時刻はすでに夕方の6時を過ぎていた。店主シズさんも、自身の仕事に一区切りつけ、「まずは乾杯しようよ」と言って隣の Brasserie（ブラスリー）に私たちを連れて行ってくれた（そこでも私たちは弾いた）。そしてブラスリーから美容室に戻った後、セッキーはシズさんから髪を切ってもらった。

街中で奏で、街ゆく人々の温かさにも触れ、パリ・ジェンヌ風な髪形にもなり、もう「2019 パリ・るあん」は思い出の小箱でいっぱいだ。

我々は、ユネスコの夜以降（※るあんのパリ日記その1参照）、すっかりお世話になったシズさんにお礼を言うと、可愛らしい美容室を後にした。

そして私たちは、Navigo（ナヴィゴカード）を駅の改札でピッとかざすと、メトロに乗り込む。乗り継ぎもすっかり慣れた。モンパルナス駅から12番線で2つ目の駅 Volontaires（ヴォロンテール）で下車。

愛すべき2つ星ホテル「Hotel Cactus（オテル カクタス）」に帰ってきた。

さて、そろそろ旅の終わりも近づいてきた。ムフタル通りを練り歩いた晩は、つまりパリ最後の夜は、外食はやめて、お部屋パーティーとなった。私たち、モンパルナス駅近くの MONOPRIX（モノプリ。フランスのスーパー）に寄って、食材やワインを買ってきた。リーズナブルな値段で、どれも美味。よく食べ、よく笑い、それでは明日にそなえて

Bon Nuit(おやすみなさい)！



カクタス・パーティー。外食歩きも楽しいけれど、部屋でのワイワイも、また楽しい。



シズさんに髪を切ってもらったセッキー。



カクタスホテルのスタッフは、温かい人たちばかりだった。感謝を込めて、の折り紙。

新しい朝。私たちは、最後の日も、パリのランチを楽しもうと、外に出かけ、カフェ「Volontaires (ヴォロンテール)」で、クロックムッシュを食べた。カフェの親父さんは、店内備え付けのテレビでワールドラグビーを観ながら、「日本、がんばってるじゃないか。良かったね」とか何とか言いながら、裏メニューのデザートを出してくれた。それから私たちは（楽器を持って出掛けたら）、モンパルナスの街中の遊歩道のベンチに腰掛け「アメリのワルツ」を弾いたり、あるいはPIERRE HERME（ピエール エルメ）の店内で色とりどりのマカロンを選んだりした。そして正午まわりに、ホテルに戻った。

やがて送迎シャトルバスの運転手が、ホテルにやってきた。

カオルン、スガちゃん、ヒラリン、そして私は、ホテルの受付係モハメッドさんにお別れの挨拶をした。

「さようなら。またパリに来たら、ここに泊まりにきますからね」

そして我々は、赤いセーターの運転手さんの後について、空港へと向かうシャトルバスに乗り込んだ。

シャルル・ドゴール空港までの道すがら、私たちはシャトルバスの車窓から、走馬灯のように様々な景色をみた。それは、19世紀の政治家、ジョルジュ・オスマンさんが皇帝ナポレオン 3 世とともに改造計画をして今に至る、統一された美しい都市、パリだ。街全体が、まるで美術館のようだ。

確かにはっきりと見えるエッフェル塔の背後には、おぼろげに、赤いアコーディオンの女性を先頭とした、謎の 4 人組の音楽隊が見える。それは私たちが練り歩いた、花の都のいくつかのシーンだった。石畳の街には、鐘の音が澄み渡り、エメラルド色のセーヌ川が流れる。そして、そこかしこにメトロがあり、カフェがあり、人々は談笑しながら私たちに手を振った。

街は穏やかな秋の日差しに包まれていた。

FIN

